

# 東シナ海開戦4

尖閣の鳴動

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

## 目次

プロローグ	13
第一章 嵐の前	18
第二章 魚釣島	42
第三章 ゴースト・ライダーズ	69
第四章 戦略的忍耐	96
第五章 戦闘へリ	122
第六章 浦賀水道	148
第七章 正攻法	174
第八章 台湾沖航空戦	195
エピローグ	209

# 登場人物紹介

## 日本

### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい  
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

### 〔原田小隊〕

はらたたくみ  
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕としての活躍。コードネーム：キャッスル。

まさだ はるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をつけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしげらたけとみ  
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける  
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みずの ともお  
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ  
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

みどうそうま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじさねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の巨頭。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ  
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ  
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしょう  
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら  
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま  
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

#### 〔訓練小隊〕

あまひひろし  
甘利宏 一曹。元は海自のメデイック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

#### 〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ  
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。<sup>P M S C</sup>「ヘブン・オン・アース」内に滞在していた。

にしなゆきお  
西銘悠紀夫 元二佐。`魚釣島警備計画甲2、の指揮をとる。

あかいしとみひこ  
赤石富彦 元三佐。

こぐれりゅうじ  
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。二〇年前に引退し、北海道でマタギとして暮らしていた。

#### 〔水陸機動団〕

しほびかる  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが……。

#### 〔航空自衛隊〕

ながせゆたか  
永瀬豊 二佐。原田が所沢の防衛医大付属病院で世話になった医師。防衛医大卒で陸上自衛隊のレンジャー・バッジを持っている変わり者。

みやけたかとし  
三宅隆敏 三佐。予備自衛官。五藤彬の恩師。

#### 〔警戒航空団〕

とがわけいこ  
戸河啓子 二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

### (第六〇二飛行隊)

うちむらいたいじ  
内村泰治 三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上がり。

### 〈海上自衛隊〉

さいきまさあき  
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本側代表団を率いる。

かわはた ゆ たか  
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

しもぞのしげ き  
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

い せ ざき たもつ  
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

### (第一潜水隊群)

ながもりともゆき  
永守智之 一佐。第一潜水隊群司令。

うぶかたて お  
生方盾雄 二佐。`おうりゅう、艦長。

しんどうあら た  
新藤荒太 三佐。`おうりゅう、副長兼航海長。

むらにしこうじ  
村西浩治 曹長。航海科。作戦の全般を監督する。原田拓海とは同期で、生徒隊繋がり。

### 〈外務省〉

くじょうひろし  
九条 寛 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。`ヘブン・オン・アース、日本側の事務方トップ。

### 〈防衛省〉

くわばらひろし  
桑原博司 防衛政務官。国防部会、日台友好議連のメンバー。

### 〔豪華客船 `ヘブン・オン・アース、〕

ガリーナ・カサロヴァ `ヘブン・オン・アース、の船医。五ヶ国語を喋るブルガリア人女性。

ごとうあきら  
五藤 彬 `ヘブン・オン・アース、の船医。感染症学が専門の研究者。

これえだひゅうま  
是枝飛雄馬 プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘われ、`ヘブン・オン・アース、に乗り込んだ。

なみかわ えみ こ  
浪川恵美子 是枝が思いを寄せるピオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

ナジーブ・ハリーフア ハリーフア&ハイガー・カンパニーのCEO。豪華客船内のバイオ・テロの首謀者。

## /// アメリカ ///

### 〈陸軍〉

マーカス・グッドウィン 中佐。グリーンベレーのオブザーバー。

### 〈海軍〉

クリストファー・バード 元海軍少将。太平洋相互協力信頼醸成措置会議のアメリカ側代表団。佐伯昌明元海上幕僚長のカウンターパート。

### 〈海兵隊〉

ジョージ・オブライエン 中佐。海兵隊オブザーバー。

### 〈ネイビーシールズ〉

カイル・コートニー 曹長。チーム1のベテラン。

エンリケ・リマ 大尉。部隊の指揮をとる。

## /// 中国 ///

### (中南海)

パンホンダ  
潘宏大 中央弁公庁副主任。

### (国内安全保衛局)

チンチョウファン  
秦卓凡 二級警督(警部)。

スウエ シユエンロン  
蘇躍 警視。許文龍が原因でウルムチ支局に左遷されたと思っていた。

### 〈海軍〉

### (総参謀部)

レンスユアン  
任思遠 少将。人民解放軍総参謀部作戦部特殊作戦局局长兼特殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアントン  
黄桐 大佐。局次長。

### (四一四突撃隊)

ゴンウェイホン  
公衛紅 大佐。突撃隊隊長。

トワンイーチ  
鄧一智 中尉。副官。

タオカンチア  
陶剛強 中佐。襲撃部隊副隊長。

モユウキン  
莫裕堅 少佐。機関室襲撃のリーダー。

シユイヤン  
徐陽 曹長。

(`蛟竜突撃隊。)

シユイヌン  
徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊、を指揮する。

(南海艦隊)

トシヤオニン  
東曉寧 海軍大将 (上将)。南海艦隊司令官。

ホワイチ  
賀一智 海軍少将。艦隊参謀長

ワントン  
万通 大佐。艦隊対潜参謀。

(東海艦隊)

タンドンミン  
唐東明 大将 (上将)。東海艦隊司令官。

マチンリン  
馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。アメリカのマサチューセツ工科大学  
でオペレーションズ・リサーチを研究し、博士号を取った。そ  
の後、海軍から佐官待遇でのオファがあり、軍に入る。唐東明  
の秘蔵っ子。

(K J - 600 (空警 - 600))

ハオフェイ  
浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つ  
エンジニア。

イエファン  
葉凡 少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー  
秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。  
電子工学の修士号をもつ。

カオシュエビン  
高学兵 中尉。機付き長。浩が関わらずと前から機体開発に関わ  
っていたベテランエンジニア。

(Y - 9 X 哨戒機)

チュンクイラン  
鍾桂蘭 少佐。AESAレーダーの専門家で、哨戒機へのAESA  
レーダーの搭載を目指す女性。

(第 164 海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン  
姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤン  
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン  
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大  
佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を  
立てさせると有能。

タイイーチ  
戴一智 少佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体にな  
り旅団情報参謀に任命された。

(台湾)

ライシヤオチョウ ロンユン  
頼筱喬 サクラ連隊を率いて戦死した頼龍雲陸軍中將の一人娘。台

北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が`チャオ、と呼び、店の開店を支援している。

ワンチーハオ  
王志豪 退役海軍中将。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

ワンウエンション  
王文雄 司馬の知り合いで、司馬は`フミオ、と呼ぶ。京都大学法学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親善協会の幹部候補生兼党の対外宣伝部次長。

## 〈陸軍〉

### （陸軍第 601 航空旅団）

フーシヤンジエン  
傅祥任 少将。旅団長。

フォンチェンダマン  
馮陳旦 中佐。作戦参謀。

ピンロンイ  
平龍義 少佐。第 1 中隊長。

ランチャーリン  
藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。第 1 中隊ナンバー 3 の乗り手。コールサイン：マリリン。

ファンイーチェン  
黃益全 少尉。藍志玲大尉の前席射撃手。既婚者のベテラン。

### （フロッグマン部隊）

ホーイーージュン  
何一中 大尉。フロッグマン部隊を指揮する。

## 〈海軍〉

リーチーチヤン  
李志強 大将。

ツァイズン  
蔡尊 中佐。

### （`海龍、）

イエンシェンハオ  
顏昇豪 大佐。`海龍、艦長。

チュウフイ  
朱蕙 中佐。`海龍、副長。以前は司令部勤務で燻っていたが、切れ者の女性。

## （台湾軍海兵隊）

### （両棲偵捜大隊）

ユエウエイルン  
岳威倫 中士（軍曹）。狙撃兵。コードネーム：ドラード。

ルードンファ  
呂東華 上等兵。狙撃兵。

### 〔第 99 旅団〕

チェンヂーウエイ  
陳智偉 大佐。台湾軍海兵隊第 99 旅団の一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン  
黃俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

ウージンフー  
呉金福 少佐。情報参謀。

ヤンヂーミン  
楊志明 二等兵。美大を休学して軍に入った。

### 〈空軍〉

リーイェン  
李彦 少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジェンホン  
劉建宏 中佐。第17飛行中隊を率いる。

## ///シンガポール///

### 〈インターポール・反テロ調整室〉

シユウエンロン  
許文龍 警視正。RTCN代表統括官。

メアリー・キスリング RTCNの次長。FBIから派遣された黒人女性。

しばたゆきお  
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボムホ  
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

## ///イギリス///

### 〈英国対外秘密情報部 (MI6)〉

マリア・ジョンソン MI6極東統括官。<sup>オーバーロード</sup>大君主。

東シナ海開戦4 尖閣の鳴動



## プロローグ

豪華客船「ヘブン・オン・アース」船医の五藤彬<sup>あきら</sup>医師が病室に駆け込むと、六人部屋の一番奥、海側のベッドのカーテンが全開にされ、防衛医大から派遣された永瀬<sup>ながせ</sup>豊<sup>ゆたか</sup>二佐が患者に馬乗りになりながら胸部を押し続けていた。

心拍停止のアラームが鳴り響いている。

予備自衛官に登録したばかりのもう一人の応援医師・三宅<sup>みやけ</sup>隆敏<sup>たかとし</sup>三佐は、人工心肺装置に取りついて準備していた。

「……駄目だったか」

その光景に、五藤は絶句した。

「サイトカイン・ストームを止められなかった」

と、胸骨圧迫を続ける永瀬が言った。十分間続けているが、心拍は戻らない。二度自動体外式除細動器<sup>D</sup>も使用したが、反応は無かった。

「どうするね？　ここにエクモが無い以上、心臓が止まった状態で人工心肺装置を使っても意味は無い」

「人工心肺装置を使つての延命は拒否するというのが、患者の希望でした」

「では、どうする？　五藤先生、あなたが主治医だ。決めてくれ」

五藤は、その場の全員の顔を見た。見たといっても、全員が不織布の防護服をまとい、N95マス

クに帽子、ゴーグルまで装着している。それこそ、視線を交わすことしかできなかった。

空気を外に逃がすための大型扇風機のモーター音と、各種センサーのアラーム音が鳴り響く。最近の集中治療室は、どこもこんな感じだ。

ここはICUではなく、病室には潮の香りが立ちこめているが、それはもう気にならない。

「わかりました。救命中止、死亡宣告します——」  
この言葉で永瀬医師がベッドから降りると、両手を合わせた。

「この船に乗られなければ、まだまだ長生きできただろうが、幕僚長まで上り詰めたんだ。良い人生だっただろう。それに、これは公務死となる。

ご遺族には、それなりの見舞金も出る」  
「ご遺体はどうするんですか」

看護師として乗り込んできた原田拓海一尉が尋ねた。

デッキから海面に投げ込まれた中国人感染者の遺体は、海保の巡視船によって銃撃され、文字通り海の藻屑とされていた。

これからも増えるだろう遺体の置き場所は、船内には無い。かといって、遺体を勝手に海に投げ捨てることもできない。

「コンテナ船を一隻確保して、まもなくランデブーできるという話だ」

永瀬が安心させるように言った。

「ボディバッグを二重に包み、浮き輪をつけて船尾デッキから海に流す。後ろからついてくる海保の巡視船のボートが、遺体を回収してコンテナ船に運ぶ。その船には化学学校の隊員が乗っていて、完全防備で作業を行い、冷凍コンテナにしばらく安置するらしい。水葬とは言えないが、海将殿も最期は波に揺られて本望だろう」

「でも、その後はどうするんです？ 陸揚げする

わけにもいかないでしょう」

「国有の無人島に、焼却場を用意する方向で検討しているらしい。最低でも、一〇〇〇体の焼却は想定するよう言っておいたが」

「中東呼吸器症候群の致死率だと、その程度は覚悟すべきでしょうね」

五島医師が、カルテに患者の死亡時刻を書き込みながら口を開く。

ここで原田が、隣の是枝飛雄馬（こしえだひゆうま）に視線を向けた。彼はエンタメ部門で雇用されていたバイオリニストだった、今はここで雑用係として働いていた。

「ご苦労様でした。後は、自分たちで措置しますので先生方は休んでください」

医師らが黙禱（もくとう）してからこの場を去ると、原田は繋がれていたセンサーや輸液の針を外しにかかった。

「寝間着のポケットを確認して、あとは指輪を外

してください。無くさないように」

外した結婚指輪をテーブルに置くと、アルコール・スプレーで消毒した。

「……今朝まで、元気だったのに」

「でも、コロナでも昼間は元気だった人が、夜眠ったまま亡くなるというケースは何例もあった。

海将は、たまたまツイてなかったんですよ。……彼女は、助かることを祈りましょう。先生がたも、

先手先手で治療してくれるだろうし」

身なりを整え終わると、ボディバッグに二重に遺体を包んだ。ストレッチャーにのせ、ボディバッグをアルコール・スプレーで更に消毒した。

エレベータを使って海面に近い後部デッキにおりる。乗組員が滑り台のようなスロープを用意してくれていた。

きっと、大航海時代からこうして亡くなった乗組員を水葬していたのだろうなどは枝は思った。

客船の背後に、巡視船のボートが迫ってきた。

クルーは全員、白い防護服を着ていた。

ボディバッグに、浮き輪代わりのライフベストを巻きつけると、四人がかりでボディバッグを持ち上げ、スロープから海面へと落とした。

遺体は一瞬波間に沈んだが、すぐ浮かび上がった。海保のボートが、そのボディバッグに向かって小刻みに針路を修正した。

すべての作業が終わると、是枝は大きなため息を漏らした。そもそも、生まれてこのかた死人を見たこともなかった。物ではない、先ほどまで魂たましいが宿まっていた身体を抱えて作業するのは、精神をすり減らした。

「これ、まだまだ続くんですよね」

「明日から増えるだろうな。乗客乗員の全員が感染したとは思えないけど、それでも数十人の犠牲者は出るだろう」

客船は、紀伊半島の潮岬沖しおのみなさきに差しかかっていた。

すでに太陽は没していたが、空にはまだ僅かな明るさが残っていた。

東アジアを暴風が見舞っていた。

きっかけは、香港ホンコンを陥落させて勢いづいた中国の行動だ。

台湾攻略にとりかかった中国は、南シナ海に浮かぶ台湾が支配する東沙島を電撃攻略してこれを奪取した。

島を守っていた台湾軍海兵隊は、海上自衛隊潜水艦の助けも借りて闇夜に脱出に成功したが、日本はいたるところで、この紛争に巻き込まれていた。

尖閣沖せんかくでは、台湾軍が報復に中国の海警艦を五

隻も撃沈し、火の手はすぐそこまで迫っていた。

そして、東アジアの緊張緩和を目的とした各国の外交軍事使節団を乗せた豪華客船は、イスラム系のテロ・グループにシー・ジャックされ、船内ではテロリストが持ち込んだ致死率三〇パーセントを超える感染症が蔓延<sup>まんえん</sup>。

その一部は、中国大陸へも持ち込まれていることが発覚していた。

## 第一章 嵐の前

上海——。南京東路へと出る、昔ながらの弄堂タンと呼ばれる狭苦しい住宅街は、半径五〇〇メートルにわたり完全に封鎖されていた。一〇〇台を超えるパトカーや消防車が出て、一帯を包囲したのだ。

彼らが後に《爆心地》と呼ぶことになる、車も入れない狭い通路の手前には、テントがいく張りも建てられ、密閉型の防護服と酸素ボンベを背負った防疫部隊が動き回り、捜査と消毒作業を並行して行っていた。

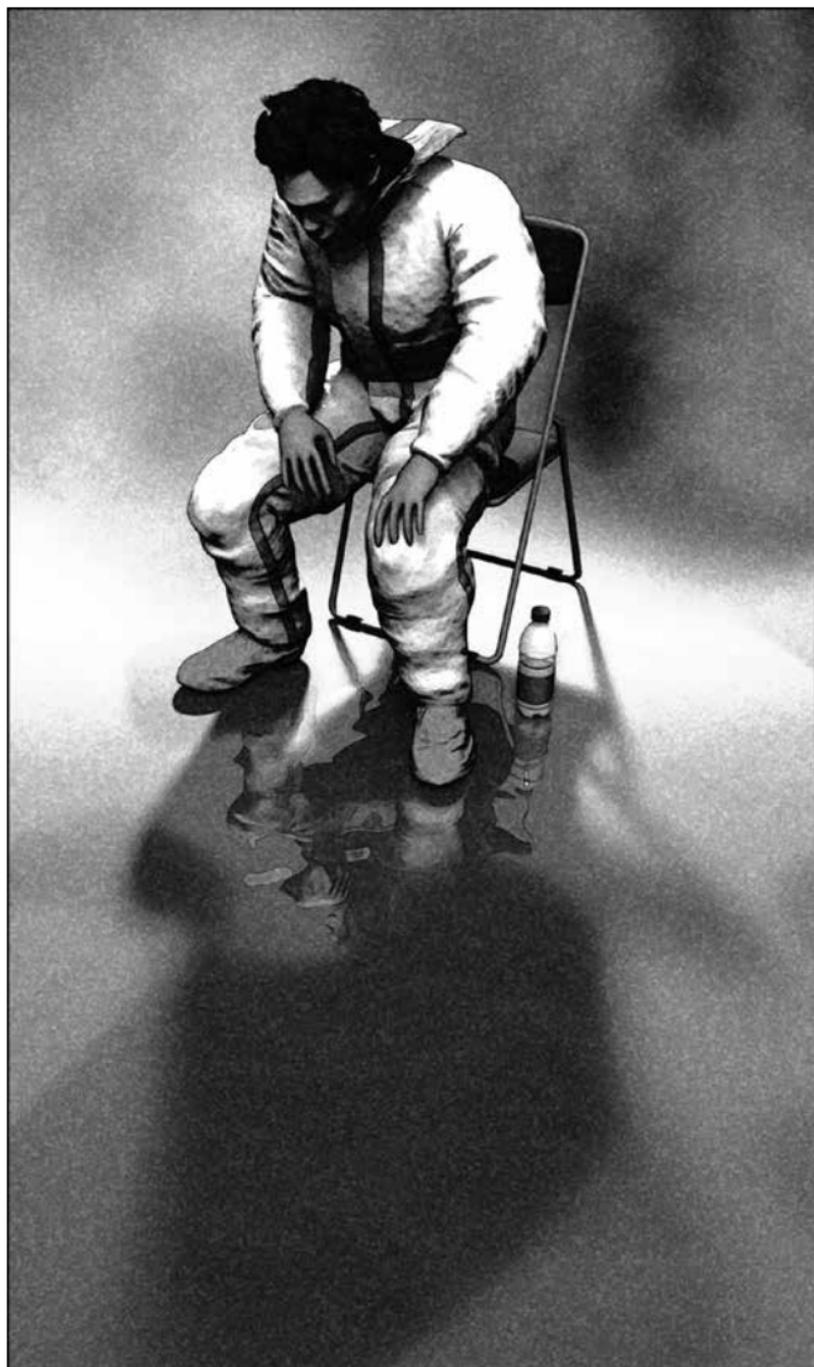
拡声器からは「住民は窓を閉めて外出するな。全ての換気扇を止め、室内でもマスクを着用せ

よ」という声が繰り返し響く。

国内安全保衛局の蘇躍警視スウユエと秦卓凡チインチュウオウファン二級警督はたか（警部）は、除染室の看板がかかる部屋の前で裸になり、冷たいシャワーを五分も浴びる羽目になっていた。更に、身につけていたものは警察手帳からスマホ、下着にいたるまで全てが焼却処分されるということを聞き、落ち込んだ。

除染室の中にパイプ椅子を入れてもらい、素肌すはだの上から直接ツナギの防護衣を着て、漫然と座り続ける。

あのテロリストは撃たれた瞬間、手に持っていたガラス製の容器を地面に投げた。二人はゴーグ



ルなどで完全装備していたわけではない。すぐの下がったが、飛沫を浴びた可能性は高かった。

「奴を説得できたと思いますか」と、秦が漏らした。二人は、ミネラル・ウォーターをちびちび飲んだ。

すでに日没から数時間経っている。辺りは真っ暗だったが、パトカーの回転灯がテントの生地に反射を繰り返すせいで、時々目眩がした。

「いや、無理だろう。あいつは、ここで死ぬ覚悟を決めていた。わからないのは、なんでわざわざあんな目立つような真似をしたのかだ。ウイルスはもう十分ばらまいた。なら、どこかに身を潜めていてもよかったのに」

「自分で死ぬことができなかつたんじゃないですか？ 英雄としてわれわれに撃ち殺され、抵抗の歴史に名を残したかつた、とか」

「どうだろうな。連中の考えることは、よくわか

らん。奴の罅を探し出し、まあ、ここからそれほど離れてはいないだろうが、それで俺たちの仕事は終わりだ。感染の疑いがある状況下で引き続き捜査に当たれるかどうか、上と交渉しなきゃならないが」

「すこし、眠りたいですよね」

「ああ、この床が水浸しでなけりゃ、俺はここで寝ているよ。つい昨日まで自分がウルムチにいたなんて信じられない」

蘇警視は、テロリストを追ってウルムチ支局から上海に飛んできたのだ。

香港を発った豪華客船の次の寄港地が、ここ上海だった。すんでのところまでテロリストの乗船に気づき、入港は阻止できた。

客船を下りた者は一人もいなかったはずだが、後に船尾から一人が水中に潜ったことが判明し、この捕り物へと繋がったのだ。

客船は軍の特殊部隊が強襲したが、作戦は失敗し、客船は東シナ海をわたり太平洋へと抜けていた。船内ではすでに感染者が大勢出ているという話だ。

ここで入り口の天幕が勢いよく開き、防護着姿の女性が現れた。帽子もマスクも身につけていなかった。

「こんな格好で、ごめんなさい。でもマスクを外さないと誰も私に注目してくれないのよ。それにこの辺りの空気はもう綺麗だから、本当はおどろおどろしい密閉型の防護着も必要無い。馬麗夢博士です。科学院武漢<sup>ウーハン</sup>病<sup>マリモン</sup>毒研究所の主任研究員です」

「武漢？ つまり、例のウイルス研究所から？」と、蘇は胡散臭いという目で応じた。

「うちは無罪です。あの研究所から何かのウイルスが漏れた、ばらまかれたという事実はありません

ん。でも、今そう言っても無駄よね」

博士は、うんざりした顔で言った。

「さて、犯人が地面に投げつけた液体から、MER Sのウイルスが検出されました。あなたがたは、感染しているおそれがあります。私がこの処理を任せました。この後のウイルス追跡にも、全責任を負います。同時に、あなたがたの経過観察もです」

「スマホまで焼却処分する必要は無いと思うが」

「そんなこと言われたの？ 消毒したらお返しします」

「なら、すぐにやってほしい。あちこちに連絡をとらなきゃならないんだ」

頷いた馬博士が、天幕の外に首だけ出して早口で命じた。その一瞬の隙に「意外に美人ですね」と隣で秦<sup>チン</sup>が囁いた。

「本人にそう言えば、ここから解放してもらえ

かもよ」と蘇が応じた。

「それで……ああ、まずシンガポールにいるあなたたちの上司から言つてがあります」

「上司じゃない。あれはただの疫病神だ」

青い医療用手袋をつけたままズボンのポケット部分のジッパーを開けた博士は、自分のスマホを取り出すと、ある動画を再生した。

アラブ系の紳士が、海を背景にスピーチしていた。

「これは、もちろん中国国内では閲覧できませんでも親切な誰かが、さっそく中文の字幕を貼り付けてアップした動画が回っています。数時間前、全世界に向けて公開されました。例の客船を乗った、首謀者の犯行声明です」

「……私が、この疫病を疫病でもって打倒する。私はここに、共産中国という疫病に戦いを挑み、

滅ぼすことを宣言する」

「中国の面子が丸つぶれだな。何者ですか？」

「西側で教育を受けた、アラブの投資家みたいね少なくとも、ウイグル人じゃない。その上司の方は、指導部はこれに激怒するだろうから、北京から強く言ってくることを覚悟してくれ、ということでした」

「そう言われても、われわれにはできることなどほとんどない。感染者は、おそらく全国に散った後だ」

「国内だけなら、まだマシよ。全世界に散つてなれば、中国国内で収められる」

「学者先生の状況観察は、どうなのですか？」

「そうですね、奇妙なことはある。客船では、バタバタと死者が出はじめています。なのに香港でもここ上海でも、まだ感染したという報告は一例

も無い。それが理解できない。まるで嵐の前の静けさよ。不気味だわ」

「この疫病は、中国を滅ぼす？」

「いえ、そんなことは絶対に無い。MERSは所詮MERSよ。それ以上でも以下でも無い。この数年で、重症肺炎の治療方法は三〇年分くらい加速された。それにCOVID-19の経験があるから、われわれはあつという間にワクチンを開発するでしょう。アメリカなら最短三ヶ月ぐらいで、われわれでも半年あればメッセンジャーRNA型ワクチンの開発にこぎ着ける。ある程度拡散したとしても、中国は微動だにしない。あなたたちもたとえ感染していても、体力があるなら生き残れます。一時的にパニックは起こるだろうし、国民はまた不便な生活を強いられるだろうけれど、われわれは生き残る。ならば、まずわれわれは、犯人のここまでの足跡を追わないとね。潜んでい

た場所を特定して、接触した人間を隔離します。最優先は、上海市内での拡散を阻止すること。列車や飛行機で拡散した分は、それぞれの都市に任せるしかない」

「わかった。宿の数は多いし監視カメラもない場所だらけだが、聞き込みと指紋の照合で潜伏先には辿り着けるだろう」

「結果を出してくださいね。今、この大都市に必要なのは、医学ではなく警察力ですから。二人には、六時間おきに検温と検査を、毎日一回のレントゲン検査も行ってもらいます。それで二人の行動の自由を保障しますので」

「出歩いて大丈夫なんですか？」

秦が不安そうな顔で尋ねた。

「COVID-19は無症状な状態で感染を広めた。それと同様の能力をもっているという仮定に立つても、これだけしつこく検査をやって感染を探知

できないなら、このウイルスにはお手上げということになる。お二人は、それを試すモルモットでもあるの。体調の異変を感じたら、すぐ報告してください。あと、マスクだけは絶対に外さないように。感染がわかるまでは自由に動いても結構です。服もすぐに用意させます。防護服を着用する必要ありません」

「助かった。眠気覚ましのドリンクもほしいが」  
 「水分は多めにとってください。できれば、ビタミンやミネラルが入ったゼリーで摂取した方がいいわね。保健部の秘密基地があるのよね？そこをお借りします。クラスターが発生した時に備えて、対応チームを分散配置する決まりになっているので」

「お好きにどうぞ。エアコンとトイレくらいはある」

「蘇さん、でしたか？ あなたの上司は、あなた

を誉めていたわよ。迷ったらあいつの勘に従え、必ず結果を出す男だからと言っていました」

「それは証明されたな。こうして犯人に辿り着いた。だが、感染爆発を防がないことには、喜んでいい話など一つもない」

「仰る通りね！一緒に頑張りましょう」

博士は、まだ三十代半ばだろうかと蘇は思った。若さの割には修羅場慣れしている感じがするのは、あのコロナの災難を経験したからか。

自分らに何ができるかはわからないが、上海での感染爆発を防ぐことが最優先であることは論を待たない。

もうしばらくは、寝る暇もなさそうだと思った。

台湾は、東沙島を失った悲しみや怒りより、東沙島から奇跡の脱出をやったのけた台湾軍海兵隊

の帰還に沸いていた。

潜水艦が台湾南部の左営軍港に寄港した直後、大陸から弾道弾による攻撃を受け基地施設の多くが破壊されたが、幸い潜水艦は無事だった。

その現場から脱出して台北へ戻った陸上自衛隊水機団の北京語講師兼格闘技教官の司馬光一佐は、その日一日ホテルに籠もり、ふて寝して過ごした。電話の受話器を外して、ノックにも出なかった。

夕方テレビを点けると、国防部が派手な会見を開いていた。部隊を率いていた隊長がインタビュアーに応じていた。——闇夜に乗じて敵の裏をかき、全員で海に入り、一キロ以上を泳いで味方の潜水艦に整然と乗り組んだ。付近には武装漁船がうじゃうじゃいたが、気づかれることはなかった。ただ、島に残すしかなかった負傷兵には申し訳無いと思う。彼らが正当な扱いを受けられることを祈

っている——そう述べていた。

解放軍は、夜が明けてから投降してきた負傷兵の映像をナレーションと音楽付きで大々的に流していたが、ここ台湾では効果は無かった。

その脱出作戦は、非公表ながら、キスカ作戦と命名され、海上自衛隊の潜水艦も一隻参加した。その協力があってこそ成功した作戦だ。

海自潜水艦は速度が出ない台湾海軍の旧式潜水艦を護衛して現場海域から脱出し、その途中、やむなく解放軍のフリゲイトを一隻撃沈していた。

そうまでして台湾側に協力したのに、海自潜水艦の性能に驚嘆した台湾側は、なんとこの海自潜水艦を乗っ取るという暴挙に出たのである。

現場のとっさの判断で、台湾側のオプザーバーを乗せるという形で左営基地を脱出していたが、まだ台湾周辺海域に留まっているはずだ。

司馬にとって、何もかもが癢にさわる展開だった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。